

「旧制第一高等学校における政治学講義草稿」について

松 沢 弘 陽

ここに紹介するのは、東京女子大学丸山眞男文庫所蔵のノート・草稿類の整理のなかで発見された、一九四七年に旧制第一高等学校で行った政治学講義の原稿（資料番号四九一）である。『丸山眞男記念比較思想研究センター報告』前号に紹介した、同年一月三、五両日に早稲田大学で行った「現代政治学の課題」（資料番号三四八―三および三八七）と時期を同じくし、同じ年の春に発表された「科学としての政治学」（『人文』第一巻二号、一九四七年六月、『丸山眞男集』第三巻）を承けるもので、丸山眞男の戦後初期における新しい政治学の構想を示すものとして興味深い内容である。原稿自体には、冒頭に「第一高等学校講義——政治学」と記されており、字体とインキの色から推して、講義の折に原稿に記されたものと思われる。この原稿が収められていた封筒には、丸山の自筆で「旧制第一高等学校における政治学講義草稿（一部——法制経済）」とあるが、これは後になって丸山が原稿を整理する折につけたものと思われる。

原稿は、コクヨ、日本評論社、潮流社、山吉紙、学納寿美屋製、東京女子大学原稿用紙などのマークがついた二〇〇字詰原稿用紙一三六

枚の裏に書かれている。

この講義には、一高生として受講した坂本義和の貴重な証言がある。「私がはじめて丸山先生の警咳に接したのは、旧制一高の一九四七年前期の特別講義だった。天野貞祐校長のもとで誰かが考えたらしく、社会科学の片鱗を学ばせようという趣旨で、東大から四人の講師が招かれた。前期は丸山眞男のほかに木村健康（フィロソフィカル・ラディカルズの思想）、後期は岡義武（フランス革命からワイマル共和国まで）と尾高朝雄（ラートブルフの法思想）の諸先生だった。ただし、学期の順序は逆だったかもしれない。最近聞いたところでは、タダ同然の謝礼での出講だったとのことで、当時の先生方の熱意がうかがわれる。事実どれも教室に熱気のこもる、新鮮な講義だった。

その頃の私は、終戦後の混乱のなかで、自分のアイデンティティを模索して悪戦苦闘していた。そのすぐれて内面的な問題に、哲学を支えとして内面的に取組んでいながら、なにか生産的でない袋小路に突きあたった閉塞感をいだいていた。その時に、丸山先生の講

義に出会った。先生はウェーバーの支配の正統性の三類型について話され、つづいて天皇制の明晰な分析へと講義を進められた。私はカリスマという言葉をはじめ、新しい知識をえたが、それはやや副次的なことだった。

私にとって最大の発見は、内面的な問題が、社会と歴史の相のもとに、社会科学的思想分析の対象になりうることを知ったことだった。(略)そして、こういうことができるのなら、文学部ではなく法学部に行こうと決心したのだから、私にとっては重大発見だったのである。」「(醒めた規範的リアリズム)、『丸山眞男集』第五巻附録月報3、一九九五年一月)

前記の丸山自筆の表題と坂本の回想から、講義は、一高のカリキュラムに長く続いていた「法制経済」の枠を使って、新しい学問の息吹きを伝えようとしたプログラムの一環で、丸山は「政治学」を担当したということであろう。開講時期について坂本は「前期」とした上で「学期の順序は逆だったかもしれない」と留保しているが、この点は後期であることが判明した。すなわち、丸山ゆかり夫人の好意で調べさせていただいた丸山の一九四七年のポケット・ノートには、九月三〇日の項に「卒業式、午後一高 ファシズム」と、一二月の部分には「一月十一日まで一高休み」とあり、一九四八年のそれには一月三十一日と二月一日の項の間に「二高の試験のこと」「二月一九日の項には「一高レポート締切り」とある。一九四七年後期の講義であることがわかる。

原稿は二回の講演である「現代政治学の課題」のそれと比べて、一学期間にわたっているためか、やや整理が悪い。

一 原稿に欠落が多く前後がつかない。

二 本稿作製の過程で、詳しく調べたところ、原稿の欠落を埋めると思われる、二・三枚のまとまりの原稿断片が数点発見された。

三 錯簡があるが、その全てを特定することは難しい。

四 したがって、章・節とそれより下の項目を示す数の表示がつかない。

五 文字に判読が難しいものがあり、中には丸山独自の簡略化のための符号のようなものも見られる。

これについて今回の発表にあたっては次のような要領で原稿整理を行なった。

一 欠落箇所については、それを埋めると思われる断片原稿を挿入し、その箇所に断片原稿の資料番号を記した。

二 錯簡については文脈と原稿用紙とから判断して本来の順序と思われる形に整えた。

一、二とも、現在確実と判断されるかぎりの整理にとどめ、なお今後の資料発見や検討をまって改善したい。

三 丸山の加筆・抹消の結果に従って本文を作り、加筆・抹消以前の原文を残すことはしない。

四 原稿欄外に記された記入は「(欄外)……」として本文の行間に組み入れる。

五 史料からの引用については、丸山文庫の手沢本と照合したが、

原稿中の丸山の文をなおすことはしなかった。

なお、本稿準備の過程で「日本における政治学の発達（メモ・草稿）人文第二号原稿 早稲田大学講演」と自書された袋に二〇〇字詰原稿用紙三五枚の原稿（資料番号一一二）があるのに気付いた。丸山が記したように「科学としての政治学」（『人文』第二号）と『センター報告』前号に載せた早稲田大学講演「現代政治学の課題」のための原稿であろうが、一高政治学講義の序論部分に用いられた可能性も考えられる。

本篇の、丸山が保存していた原稿の原型はPDFで閲覧可能である。

原稿の読解と整理は、川口雄一・山辺春彦・松沢弘陽が協力して行ない、解説は三人の議論をふまえて松沢が担当した。